主日礼拝説教 「マ ジ礼拝 ！」

日本基督教団石神井教会　2020 年 6 月 28 日

【使徒書日課】ヘブライ人への手紙　12章18～29節

18-19あなたがたは手で触れることができるものや、燃える火、黒雲、暗闇、暴風、ラッパの音、更に、聞いた人々がこれ以上語ってもらいたくないと願ったような言葉の声に、近づいたのではありません。20彼らは、「たとえ獣でも、山に触れれば、石を投げつけて殺さなければならない」という命令に耐えられなかったのです。21また、その様子があまりにも恐ろしいものだったので、モーセすら、「わたしはおびえ、震えている」と言ったほどです。22しかし、あなたがたが近づいたのは、シオンの山、生ける神の都、天のエルサレム、無数の天使たちの祝いの集まり、23天に登録されている長子たちの集会、すべての人の審判者である神、完全なものとされた正しい人たちの霊、24新しい契約の仲介者イエス、そして、アベルの血よりも立派に語る注がれた血です。

25あなたがたは、語っている方を拒むことのないように気をつけなさい。もし、地上で神の御旨を告げる人を拒む者たちが、罰を逃れられなかったとするなら、天から御旨を告げる方に背を向けるわたしたちは、なおさらそうではありませんか。26あのときは、その御声が地を揺り動かしましたが、今は次のように約束しておられます。「わたしはもう一度、地だけではなく天をも揺り動かそう。」27この「もう一度」は、揺り動かされないものが存続するために、揺り動かされるものが、造られたものとして取り除かれることを示しています。28このように、わたしたちは揺り動かされることのない御国を受けているのですから、感謝しよう。感謝の念をもって、畏れ敬いながら、神に喜ばれるように仕えていこう。29実に、わたしたちの神は、焼き尽くす火です。

【福音書日課】ヨハネによる福音書　4章5～26節

5それで、ヤコブがその子ヨセフに与えた土地の近くにある、シカルというサマリアの町に来られた。6そこにはヤコブの井戸があった。イエスは旅に疲れて、そのまま井戸のそばに座っておられた。正午ごろのことである。

7サマリアの女が水をくみに来た。イエスは、「水を飲ませてください」と言われた。8弟子たちは食べ物を買うために町に行っていた。9すると、サマリアの女は、「ユダヤ人のあなたがサマリアの女のわたしに、どうして水を飲ませてほしいと頼むのですか」と言った。ユダヤ人はサマリア人とは交際しないからである。10イエスは答えて言われた。「もしあなたが、神の賜物を知っており、また、『水を飲ませてください』と言ったのがだれであるか知っていたならば、あなたの方からその人に頼み、その人はあなたに生きた水を与えたことであろう。」11女は言った。「主よ、あなたはくむ物をお持ちでないし、井戸は深いのです。どこからその生きた水を手にお入れになるのですか。12あなたは、わたしたちの父ヤコブよりも偉いのですか。ヤコブがこの井戸をわたしたちに与え、彼自身も、その子供や家畜も、この井戸から水を飲んだのです。」13イエスは答えて言われた。「この水を飲む者はだれでもまた渇く。14しかし、わたしが与える水を飲む者は決して渇かない。わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る。」15女は言った。「主よ、渇くことがないように、また、ここにくみに来なくてもいいように、そ

の水をください。」

16イエスが、「行って、あなたの夫をここに呼んで来なさい」と言われると、17女は答えて、「わたしには夫はいません」と言った。イエスは言われた。「『夫はいません』とは、まさにそのとおりだ。18あなたには五人の夫がいたが、今連れ添っているのは夫ではない。あなたは、ありのままを言ったわけだ。」19女は言った。「主よ、あなたは預言者だとお見受けします。20わたしどもの先祖はこの山で礼拝しましたが、あなたがたは、礼拝すべき場所はエルサレムにあると言っています。」21イエスは言われた。「婦人よ、わたしを信じなさい。あなたがたが、この山でもエルサレムでもない所で、父を礼拝する時が来る。22あなたがたは知らないものを礼拝しているが、わたしたちは知っているものを礼拝している。救いはユダヤ人から来るからだ。23しかし、まことの礼拝をする者たちが、霊と真理をもって父を礼拝する時が来る。今がその時である。なぜなら、父はこのように礼拝する者を求めておられるからだ。24神は霊である。だから、神を礼拝する者は、霊と真理をもって礼拝しなければならない。」25女が言った。「わたしは、キリストと呼ばれるメシアが来られることは知っています。その方が来られるとき、わたしたちに一切のことを知らせてくださいます。」26イエスは言われた。「それは、あなたと話をしているこのわたしである。」

「水をください」

いよいよ、来週から再び、皆さんをこの礼拝堂にお迎えすることになりました。どれだけの皆さんが戻って来てくださるでしょうか。なお、「集まりすぎないように」と気遣いながらですが、遠慮せずに戻って来ていただきたいと思います。もちろん、インターネットを通しての礼拝を続けてくださってもよいのです。これまで、日曜日の午前中に会堂まで足を運ぶことが難しくて礼拝に加わることができずにいらした方もあるでしょう。

三か月、「ライブ配信」礼拝を続けてきて、わたしは、インターネットの礼拝で、実際に「集まる」ことはできなくても、「集まり」に連なることはできる、と思うようになりました。今のわたしの願いは、来週から再開する「集まり」に戻って来られる皆さんが、この礼拝堂で毎主日に現れる「集まり」に加わることができないでいる方々、「集まり」の外にいらっしゃる方々に、今まで以上に思いを向けてくださるようになることです。

わたしたちは皆、「集まり」に加わることができない経験をしました。「集まり」のないことに「渇き」を憶え、どうにかして「集まり」に代わるものを得ようとしてきました。それは、礼拝堂になお留まって奉仕者として礼拝を執り行ったわたしどもも同じです。そうであればこそ、「集まり」になお加わることができない方々のことを心に留めたいのです。「集まり」に加わらずにいる方々の思いに寄り添いたいのです。その人たちの「渇き」がどのようなものであるのか、今は、以前よりも少しは分かるようになっているはずだからです。だから、今こそ、その人たちがどうしたら「集まり」に連なることができるか、その人たちをどうしたら「集まり」へとお迎えすることができるか、問い続けたいのです。

「水がわき出る」

福音書日課（ヨハネ４章）で、主イエスは井戸縁で、「**水を飲ませてください**」とサマリアの女に声をかけられました。きっと、水を飲ませてもらったのでしょう。けれども、主イエスはその女に言われたのです、「実は、あなたこそ、わたしに『水を飲ませてください』と言うべきなのです」と。

「集まり」を再開するにあたって、役員会でもまだ結論が出ていないことの一つは、「聖餐」をどうするかということです。「パンと杯」を分かちあうことは、「御言葉」を聞くことと並んで、わたしたちの礼拝の欠かすことのできない焦点の一つです。「聖餐」用の「パンとぶどう汁」を個包装にした商品を取り寄せることも検討していますが、リスクが無いわけではありません。

「聖餐」よりも優先順位は低いかもしれませんが、来会された皆さんに茶菓や飲食を提供することはいつから再開できるのか、心配してくださっている方も少なくないでしょう。日曜日の朝、来堂されると、まず、水かお茶を一杯飲まれてから礼拝堂に上がって行かれる方は、少なくありませんでした。暑い中を歩いて来られて、「水を飲ませてください」と願われる方に、お断りすることはないでしょう。十分に注意をすれば、わたしたちが提供できるものは、いくらでもあるはずです。

わたしたちは、確かに、日曜日の教会に来て、主イエスとお会いすることをこそ願っています。主イエスから「命の水」を飲ませていただくことを願って、御言葉を求めるのです。主イエスを通して「命のパン」を食べさせていただくことを願って、聖餐の食卓に着くのです。「教会に行ったら、礼拝で霊的なものをいただけば十分ではないか」というのも、一理あるでしょう。

けれども、主イエスは、サマリアの女との対話の中で、「**わたしが与える水を飲む者は決して渇かない**」とおっしゃるのです。「**わたしが与える水はその人の内で泉となり、永遠の命に至る水がわき出る**」と言われるのです。「渇かなくなる」というのは、わたしたちがただ満足するということではないでしょう。その人の内に「泉」がわき、「永遠の命に至る水」があふれ出るというのは、それを無駄に浪費するためではないでしょう。わたしたちの内で「泉」のように「命の水」がわき出るのは、主から「水」をお与えいただいたわたしたちが、今度は誰かにその「水」を差しだし、与えるためなのではないでしょうか。

主イエスは、サマリアの女との対話を、「井戸の水」を飲ませてもらう中で、なさったのです。霊的な「水」のことを、実際の「飲み水」を目の前にして、お示しくださったのです。

だからこそ、わたしたちは、「聖餐」をオンラインですることはできないのです。実際に裂かれたパンを分かちあい、実際に杯に注がれたぶどう汁を飲むことの中で、主がお示しくださった霊的なことがあるからです。

だからこそ、わたしたちは、なお教会で共に飲食をすることを、大切にするのです。わたしたちの実際に飲んだり食べたりという営みの中で、主がお示しくださった霊的な真理を、思い起こさせていただくことになるからです。

まことの礼拝者

「週報」に掲載しましたが、昨日、教会員の一人が逝去されました。95 歳でいらっしゃいましたが、最後までご自宅で、ご子息方のサポートを受けながらも一人暮らしをされていた方でした。四年前に奥様を先に送られましたが、奥様の介護もお一人でなさった方でした。三か月前、教会が「集まり」を取りやめる前まで、礼拝にはバスに乗っておいでになられていました。いささか突然の訃報でした。まだ、葬儀のことなど決まっていません。できれば、この礼拝堂で、皆さんにもお集まりいただいて、葬送の祈りをできたらと願っています。

この方は、若くして幼年学校から軍人になられたのです。戦後、自衛隊の発足に際して、再び自衛官になる道を選ばれました。しかし、幹部候補生として学びをする中で、「人」に頼るのではない、真の拠るべきものを求めて、奥様の通われていた教会へと導かれたのだそうです。奥様が誘われたのでしょうか。それとも、ご自身から進んでそうされたのでしょうか。退官された頃からは、日曜日に奥様と連れ立って教会への道を通われることを大切になさって来られたそうです。いつも、礼拝堂の前のほうの席にお座りになられていました。

また一つ、そのような席に空きが生まれることになりました。そのように空いた席が、この一年だけでも、いくつあることでしょうか。来週以降、そのような席を、どなたが埋めてくださるでしょうか。

主イエスは、サマリアの女に、いささか唐突に言われました、「**行って、あなたの夫をここに呼んできなさい**」と。

主イエスは、わたしたちにも、言われているのではないでしょうか、「行って、あなたの夫を、妻を、家族を、ここに呼んできなさい」と。皆さんが、信者のご家族と教会においでくださることは、もちろん願ってもないことです。皆さんが、そのようになってくだされればと思います。けれども、わたしたちには皆、信者ではない家族がいます。まだ主イエスを知らない家族がいます。本当に「永遠の命に至る水」をお与えくださる方として主イエスと出会う経験をしていない家族がいるのです。わたしにも、そのような家族がいるのです。

そのような家族を教会に連れてくることが難しいと、わたしたちは思っているかもしれません。自分自身のキリスト者としての欠けの多さが躓きになるからとか、教会に会わせたい立派な信仰者が見当たらないからとか、理由はさまざまです。そうだとしても、わたしたちは、主イエスを紹介することは、できるのではないでしょうか。それで十分なのではないでしょうか。それで十分だからこそ、主イエスとお会いすることを何よりも大切にしている信仰者の群れ、教会に、大切な家族をお連れするのではないでしょうか。誰とでも、どんな者とも、共に過ごし、共に飲み食いし、共に生きられた主イエスの面影を、わたしたちは、教会の営みの中でこそ、見ているのですから。

わたしたちは、礼拝に再び集まります。主イエスが導いてくださる「まことの礼拝」に加わることを願って、再び集まります。今、あらためて、主の御言葉と御業のもとに、すべての人が呼び集められるのです。